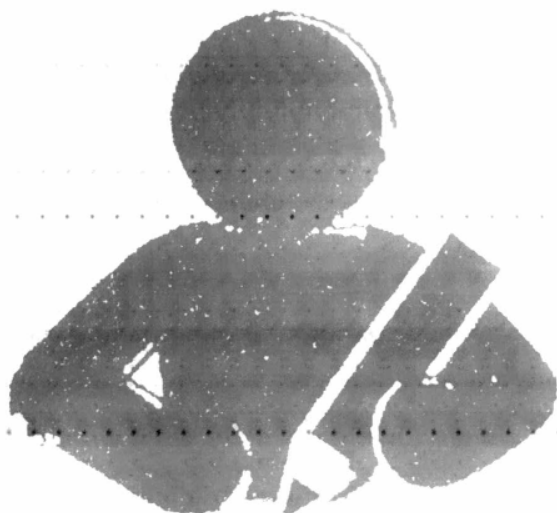


書くことを教える



書くことを教える

国際交流基金 著



国際交流基金

国際交流基金 日本語教授法シリーズ

【全14巻】



第1巻 「日本語教師の役割／コースデザイン」



第2巻 「音声を教える」 [CD-ROM付]



第3巻 「文字・語彙を教える」



第4巻 「文法を教える」



第5巻 「聞くことを教える」 [音声ダウンロード]



第6巻 「話すことを教える」



第7巻 「読むことを教える」



第8巻 「書くことを教える」



第9巻 「初級を教える」



第10巻 「中・上級を教える」



第11巻 「日本事情・日本文化を教える」



第12巻 「学習を評価する」



第13巻 「教え方を改善する」



第14巻 「教材開発」

■はじめに

国際交流基金日本語国際センター（以下「センター」）では1989年の開設以来、海外の日本語教師のためにさまざまな研修を行ってきました。1992年には、その研修用教材として『外国人教師のための日本語教授法』を作成し、主に「海外日本語教師長期研修」の教授法の授業で使用してきました。しかし、時代の流れとともに、各国の日本語教育の状況が変化し、一方、日本語教授法に関する研究も発展したため、センターの研修の形や内容もさまざまに変化してきました。

そこで、現在センターの研修で行われている教授法授業の内容を新たにまとめ直し、今後の研修に役立て、また広く国内外の日本語教育関係のみなさまにも利用していただけるように、この教授法シリーズを出版することにしました。この教材の主な対象は、海外で日本語教育を行っている日本語を母語としない日本語教師ですが、広くそのほかの日本語教育関係者や、改めて日本語教授法を独りで学習する方々にも役立てていただけるものと考えます。また、現在教師をしている方々を対象としていますが、日本語教育経験の浅い先生からベテランの先生まで、できるだけ多くのみなさまに利用していただけるよう工夫しました。

■この教授法シリーズの目的

このシリーズでは、日本語を教えるための必要な基礎的知識を紹介するだけでなく、実際の教室で、その知識がどう生かせるのかを考えてもらうことを目的としています。

国際交流基金日本語国際センターでは、教師の基本的な姿勢として、特に次の能力を育てることを目的として研修を行ってきました。その方針はこのシリーズの中でも基本的な考え方となっています。

1) 自分で考える力を養う

理論や知識を受身的に身につけるのではなく、自分で考え、理解して吸収する力を身につけることを目的とします。

2) 客観性、柔軟性を養う

自分のこれまでの方法、考え方にとらわれず、ほかの教師の意見や方法を知り、客観的に理解し、時には柔軟に受け入れることのできる教師を育てることをめざします。

3) 現実を見つめる視点を養う

つねに現状や与えられた環境、自分の特性や能力を客観的に正確に把握し、自分の現場に合った適切な方法を見つける姿勢を育てることをめざします。

4) 将来的にも自ら成長できる姿勢を養う

研修終了後もつねに自分自身で課題を見つけ、成長しつづける自己研修型の教師を育てることをめざします。

■この教授法シリーズの構成

このシリーズは、テーマごとに独立した巻になっています。どの巻からでも学習を始めることができます。各巻のテーマと概要は以下の通りです。

- | | | |
|----------------------|---|-------------------------------------|
| 第1巻 日本語教師の役割／コースデザイン | } | 日本語を教えるうえでの全体的な問題を取りあげます。 |
| 第2巻 音声を教える | | |
| 第3巻 文字・語彙を教える | } | 各項目に関する基礎的な知識の整理をし、具体的な教え方について考えます。 |
| 第4巻 文法を教える | | |
| 第5巻 聞くことを教える | | |
| 第6巻 話すことを教える | | |
| 第7巻 読むことを教える | | |
| 第8巻 書くことを教える | | |
| 第9巻 初級を教える | | |
| 第10巻 中・上級を教える | | |
| 第11巻 日本事情・日本文化を教える | | |
| 第12巻 学習を評価する | | |
| 第13巻 教え方を改善する | | |
| 第14巻 教材開発 | | |

■この巻の目的

かん もくてき

この巻の目的は、主に海外の日本語の授業で、学習者の「書く力」を伸ばすためには、どのような点に注意して、どのような流れで教えたらいいか、考えることです。

この巻で扱っていることは、以下の4点です。

- ①「書くこと」とはどのようなことなのか、今まで日常生活で書いた経験と日本語の授業で書いた経験をふり返って比べ、問題点を考えます。
- ②「書くこと」がコミュニケーションの1つであることを大切にして、授業の中でその力を伸ばすためには、どのようなポイントに気をつければいいか、考えます。
- ③②のポイントに気をつけて、授業で書く力を伸ばすためには、どのような教室活動や授業をしたらいいか、考えます。
- ④書く力の評価について、「教師だけ」が「書いたものだけ」を評価するのではない方法について考えます。

なお、この巻では、文字については取り上げません。本シリーズ第3巻『文字・語彙を教える』を参考にしてください。

■この巻の構成

かん こうせい

1. 全体の構成

ぜんたい こうせい

本書の構成は、以下のようになっています。

1. ふり返る

かえ

日常生活や、今までの日本語の授業で、どのようなものを書いてきたか、ふり返ります。そして、「書くこと」がコミュニケーションであることを意識します。

2. 指導のポイントを考える

しどう

「書くこと」がコミュニケーションの1つであることを大切にして、その力を伸ばすためには、どのようなポイントに気をつけて指導をしたらいいか、考えます。

3. 活動や授業を考える

上で取り上げた指導のポイントを生かした、書く力を伸ばすための活動や授業例を紹介します。それぞれの活動や授業が、コミュニケーションとして書くことに、どのように関係しているか、考えながら見てください。

4. 評価を考える

ひょうか

書く力を評価する方法について考えます。添削や、評価基準の作り方、また、評価を広く長くとらえて考えるためのポートフォリオ評価を取り上げます。

2. 各章の構成

かくしやう こうせい

この巻のそれぞれの章には、次のような部分があります。



ふり返りましょう

かえ

自分自身の経験や教え方をふり返ります。

じしん けいけん

かえ



考えましょう

背景理論はいけいりろんや「コミュニケーション」というものについて考えながら、「書くこと」の教え方について考えます。



やってみましょう

実際に活動をやってみることを通して、活動の理由りゆうやそれによって養うことができる力ちからについて理解を深めます。



整理しましょう

ここまで考えたこと、学んだことをもう一度整理して、その目的や意味を再確認し、今後の授業に生かしていけるようにします。

3. 【質問】

【質問】は、次のように取り組んでください。

◎グループやクラスで教授法を学んでいる場合：

ほかのメンバーや教師とのディスカッションを通して、ほかの人の考え方や解決方法かいげつほうほうも知って理解しましょう。そしてもう一度考えてみてください。

◎ひとりでこの本を読んで教授法を勉強している場合：

まず自分で考えてから、解答や解答例、解説を参考に、もう一度考えてみてください。できれば、積極的に、同僚やまわりの人の意見も聞くようにするといいでしょう。

そして、この本に書かれていることを、知識として理解するのではなく、常に、自身の教育現場に当てはめて考え、実際には、どのように現場で実現させることができるかを考えるようにしましょう。

目次

1	「書くこと」とは？	2
1-1.	日常生活での「書くこと」をふり返る	2
1-2.	日本語の授業での「書くこと」をふり返る	6
2	書く能力を高める指導のポイント	10
2-1.	表現・文型	11
2-2.	書きことばのスタイル	12
2-3.	文と文のつながり	16
2-4.	段落・まとめ	18
2-5.	構成	25
2-6.	読み手	28
2-7.	書くプロセス	32
	(1) 計画のプロセス	
	(2) 文章化のプロセス	
	(3) 推敲のプロセス	
3	書く能力を高める活動や授業のデザイン	44
3-1.	「書くこと」に慣れるための活動	44
3-2.	コミュニケーションを大切に「書く」活動	47
	(1) 「書く」活動の流れ	
	(2) 「書くこと」で「やりとり」ができるようになる活動	
	(3) 「文章表現」のための活動	